

「 さあ、朝の食事をしなさい 」

ヨハネによる福音書 21章1節～14節

説 教 軽 込 昇 牧 師

主イエスの復活について、聖書は2つのことをもって示しています。一つは、おからだめられているはずの墓が空であったということ、一つは、復活の主イエスが、弟子たちに何度もご自身を現してくださったことです。主イエスが取り去られたと嘆くマリヤに「泣くな」と声をかけ、絶望しユダヤ人を恐れて隠れていた弟子たちに「聖霊を受けよ」と仰せになり、絶対に信じないというトマスに傷跡を見せ「信じる者になりなさい」と語りかけられました。

復活の主が、こうして何度も弟子たちに現れたということは、実は、私たちにも起こります。復活の主としてお会い下さり、私たちを信じる者にしてください。「あなたがたは、イエス・キリストを見たことがないが、彼を愛している、現在、見ていないけれども、信じて、言葉につくせない、輝きにみちた喜びにあふれている（ペテロの第一の手紙1章8節）」と聖書に記されていることが私たちにも起こるのです。

旧約聖書にモーセやその後継者ヨシュアに、「靴を脱ぎなさい、そこは聖なる地だから」と仰せになった記事があります。その土地自体が聖なる場所なのだと思いますが、実は、神様がおられる場所、そこが聖なる土地なのです。たとえ私たちが悲しみや苦しみの只中にあるとしても、そこに主イエスがおられるなら、そこが聖なる土地です。そこには神の恵みが満ちています。今、礼拝をささげているここ大阪教会もそうです。「ふたり、また三人が、わたしの名によって集まっているところには、わたしもその中にいるのである」（マタイによる福音書18章20節）と主イエスが約束してくださったことは、今も私たちの中に起こっています。

私たちは、今主イエスの光に包まれています。それは、主イエスキリストが復活されたからです。しかし、私たちはそう思いたくても、それを打ち消すほどに、この世の力が強く、闇に包まれているように思ってしまう時が多々あります。それが私たちの現実かもしれません。しかし、本当にそうでしょうか。信じたいと願う私たちに、信じる者に変えてくださる神様の力の方が強い、それが神様の現実です。

今日読んだヨハネ21章はその前の20章とはうまくつながりません。本来のヨハネ福音書は、20章までで、21章は付録と言われています。20章には、主イエスの十字架で、弟子はすべて逃げてしまい、戸を閉じてこもっているところに復活の主が現れて、信じる者に変えてくださ

ったと記されており、物語が完結しているようです。ところが、それを破るように、21章には周章狼狽している弟子たちが描かれています。一度は固く信じた弟子たちがまた絶望に包まれる、これは私たちの姿を現しているともいえます。教会に通い、信じて洗礼を受け、喜んで奉仕をし、長い教会生活を送った方でも、奉仕に疲れ、また、人間関係に躓き、教会から離れてしまうこともありますし、信じていても砂をかむような思いを抱くこともあります。

この時の弟子もそうだったと思います。希望を失い、力を失った弟子たちは、主イエスの教えを宣べ伝えることをせず、主イエスに出会う前の元の生活に戻って、漁師でもやっていくしかない、と絶望の闇にさまよっています。そんな思いを抱えながら漁に出た彼らには、一晩中漁をしても魚一匹とることができませんでした。そこに主イエスが来てくださり、「舟の右の方に網をおろして見なさい。そうすれば何かとれるだろう」と声をかけられました。そして、彼らはもう一度同じように網を投げました。すると、おびたしい数の魚がとれました。やり方を変えたものではありません。ただ、救い主イエスが彼らのそばにいるということだけが変わったのです。「人間はそもそも自分の持っている能力や力で、人生の収穫を得ることはできないのだ、と聖書は言っているのです」と、ある牧師は解説します。どうせ結果が分かっているとせず、もう一度網を投げてみていいのです。私たちはキリストに贖われた命を生きているのですから。

岸辺では、弟子たちが戻るより先に、主イエスが、焚火を燃やし魚を焼いていてくださいます。そして、弟子たちの取ってきた魚を合わせて焼いてくださいます。私たちをも主イエスは用いてくださるのです。そして、「さあ、朝の食事をしなさい」と招いてくださいます。日常的な風景です。復活した主イエスが共にいてくださる、これが決定的な変化です。主イエスは、私たちの罪をあがない、私たちのために死に、そして、私たちをご自分のものとして、一緒に生きるために復活されました。復活の主イエスと共に歩む時、私たちのなす日常の業に意味があり、実りがあるのです。

主イエスが復活され、私たちの真ん中にお立ちくださいます。復活の主がおられるところ、そこが私たちの場所です。

（記 説教要約奉仕者）